

特集 ペットボトルの世界

著者	久保 正敏
雑誌名	日本ミネラルウォーター協会報.
巻	126
ページ	10-11
発行年	2010-07-15
URL	http://hdl.handle.net/10502/4859

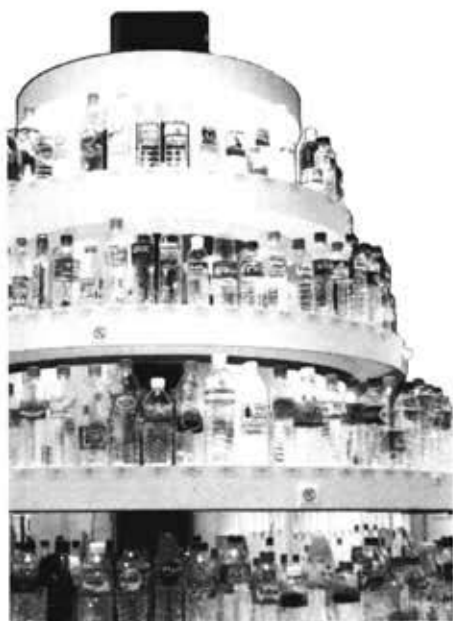
「月刊 みんぱく 2010年6月号」(国立民族学博物館)より転載

特集 ◎ ペットボトルの世界

久保 正敏

民博 文化資源研究センター

京都大学大学院工学研究科修了、工学博士。民族学に情報学を取り込む民族情報学を提唱、オーストラリア先住民コミュニティ成立史の研究などのほかに、時空間統合アーカイブズの重要性を提唱している。開催中の企画展「水の器—手のひらから地球まで」の実行委員長。



上方と江戸の両方に「水屋の富」という落語がある。海水塩分の多い井戸水に悩む大阪や江戸の下町には、それぞれ、淀川から、あるいは、神田上水や玉川上水からとった水を桶に入れ、両天秤で売り歩く「水売り」商売があった。この落語は、零細な行商人を主人公にした、やや切ない話である。その後、上水道の整備とともに水売りから水を買う習慣はすたれたが、昭和40年代以降、臭い水道水が問題となり、再び、水を買うという習慣がペットボトルと連動して広がった。そして今

や世界規模に広がった新しい水の器、ペットボトル。開催中の企画展「水の器—手のひらから地球まで」で取り上げたペットボトルを、本誌でもさまざまな角度から考えてみたい。

素材であるペットは、戦後間もない1953年に米国で発明されたポリエステル的一种で、ボトルへの利用以前から、当時の科学技術信仰のシンボルのひとつとして繊維に利用され始めた。現在では、生産される衣料用繊維の半数近くを占めるに至っており、それがボトルのリサイクルとつながる。また、トリアセテート・ベースの写真や映画フィルムが加水分解を起こし果ては雲散霧消すること(酢酸臭を発するのでピネガーシンドロームとよばれる)が1991年に判明してから、経年変化の少ないペットへの転換が進んだことも付言しておく。こうしたペットの技術的特徴について峯孝則氏から解説いただいた。日本におけるボトル入りミネラルウォーターは、食品衛生法の改正と臭い水道水を追い風として広まったのである。

「〇〇の美味しい水」など、ミネラルウォーターの命は、その取水地のブランドである。「ルルドの聖水」などの聖水にも通じる水の「ブランド信仰」が、ボトル水の普及と連動しているのは、世界中で共通するようで、企画展をひかえ多くの方々に収集をお願いして

実現した世界のペットボトル・タワー展示を見ても明らかだ。

使う側から見れば、小型ボトルは個人携帯の水の器である。かつて地域の生活で水をえる場は水源であり、そこから大きな器から小さな器へと、人手を介して引き継がれ最後に手元に至る。泥の水であろうと、その生活空間にとって大切な場所だからこそ、水源への畏敬がさまざまな儀礼やシンボリズムを生み出してきた。しかるに、小型ボトルは水源と個人を直結する器である。取水地ブランドを信じるなかから、かつてのような水源への畏敬が失われてしまいか。そしてそれは、水を飲むという身体動作の変化を促してしまいか。

ひとつはラップ飲みとの普及であり、これは日本で論争の起きている紙パック飲料の「直飲み」にもつながる。自身の台湾ボトル収集に基づく相田満氏のラップ飲み論考は、身体との関係を問う。また、ボトルの普及は、その流通にもかかわる。自動販売機の普及程度、冷蔵庫のサイズなど、ボトルの形や容量は、各地域での物流システムと連動するだろう。

ペットボトルはまた、軽くて丈夫な器としてさまざまに流用される。日本では、風車、子ども御輿、水ロケット、代用プランター、猫よけなどが知られるが、簡易な容器が求めにくい地域では大切に用いられるし、生活に根ざした多様な転用例がある。そうした一端を、兼重務氏に解説いただいた。

一方、ボトル水のブランドではなく、中身のミネラルウォーターの水質は、地球環境ともかかわる。そのほとんどが降雨に由来する地下水を原水としているので、水質はその水が経由する環境の指標となる。中野孝教氏による水質に関する科学的解説は、地球環境への眼差しを促す。

このようにグローバルなペットボトルの普及は、自然科学と人文社会科学にまたがるさまざまなテーマをはらんだ現象である。それを考えるきっかけを企画展でも見つけていただきたい。



両天秤で売り歩く水売り。
「浪速風俗図絵」(杉本書店、1968年)より転載



プラスチック製の容器につめ「聖水」
をもちかえる人びと。ルルド



京都三名水のひとつ、「染井の水」。
最近ではペットボトルを利用する姿が目立つ。梨木神社